

# 「見せびらかし」の社交の裏側で

## ——19世紀後期ニューヨーク富裕層家庭を支えた家内労働者

大 塩 真夕美

### はじめに

19世紀後半のニューヨーク（以下、NY）社交界を牛耳ったアスター夫人（Caroline Webster Schemerhorn Astor, 1830-1908）は、年に一度、そのシーズンのオペラ初日の終演後に私宅で「アスター夫人舞踏会」を開催した。その夜、夫人は美しく着飾り、フランス製の扇を持って、劇場の夫人専用のボックス席でオペラ鑑賞を楽しんだ。第2幕の途中で夫人が劇場を後にすると、これが舞踏会の始まりの合図となった<sup>1</sup>。彼女が自ら主催する舞踏会の夜にわざわざオペラ鑑賞するのは、なにもオペラ鑑賞を楽しみたいからではなかった。舞踏会を数時間後に控え、本来なら準備に忙しいはずの時間に会場となる邸宅を離れ、優雅にオペラ鑑賞をすることで、アスター夫人は、自らのかかえる家内労働者の優秀さを暗に人々にアピールしたのである。女主人がいなくとも、舞踏会の準備をすべて滞りなく進める、訓練された立派な家内労働者を十分な人数雇うことのできる経済的余裕を持っていることを、人々にアピールすることは、NY社交界に君臨する「女王」にとって、この上ないステータスであったのだ。

アスター夫人だけが、自らの富を人々に見せつけていたわけではない。19世紀後期のNY社交界では、誰もが「見せびらかし」の社交を様々な形で繰り広げていた。自らを飾るドレス、ヨーロッパから買い付けした美術品の数々、移動の際に使用する馬車と列車の専用個室、劇場のボックス席、主催する晩餐会で客をもてなす料理、邸宅そのものと複数所有した別荘、そして、その邸宅で働いた家内労働者たちも、「見せびらかし」の手段として、NY社交界に必要な不可欠であった。

家内労働者に関する研究はイギリスにおいては盛んで、ヴィクトリア時代の中流家庭や富裕層家庭における家内労働者の研究は特に多くある。例えば、*The Rise and Fall of the Victorian Servant* (Pamela Horn, 2004) や *What the Butler Saw* (E. S. Turner, 1962) などがある。また、アメリカでは *Americans and Their Servants* (Daniel E. Sutherland, 1981) や *Serving Women* (Faye E. Dudden, 1983) があり、Elizabeth L. O'Leary はアメリカ絵画に描かれる家内労働者について *At Beck and Call* (1996) で詳述している。しかし、革新主義の誘因となった社会問題やジェンダー問題として、家内労働者は看過できない集団でありながら、その研究は日本国内では例がない。19世紀後期NY社交界の研究でさえ、日本国内ではほとんどない。

事実、家内労働者がいなければ、社交界の人々の社交は成り立たなかった。また、社交だけでなく、日常生活そのものが苦勞の連続となったであろう。社交界の婦人たちは1日に何度もド

レスを着替え、一人で街を歩くことさえ許されていなかった。生まれたときから裕福な婦人たちは、入浴でさえ一人ではせず、家内労働者の助けを借りた。そのような日々の中、多くの家内労働者は雇い主たちに名前を知られることもなく、廊下ですれ違っても、顔を向けることさえ許されず、ただ黙々と屋敷のために働いた。ドラマ『ダウントン・アビー』の世界的人気からもわかるように、近年、家内労働者の世界は確実に注目をされている。本稿では、19世紀後期のNY社交界の家内労働者はどのようにして働き始めたのか、どこからやってきた人々であったのか、そして、文学作品では家内労働者はどのように描かれているのかを、イーディス・ウォートンの『無垢の時代』を舞台に考察していく。

## 19世紀後期 NY の2つの顔

19世紀後期のNYには2種類の人々が生活をしてきた。富裕層と貧困層である。富裕層の人々は、マンハッタン島の北側に住んでいた。NY社交界は、もともとオランダ植民地時代からその地位を守ってきた伝統派（Old New Yorkers）によって構成されていた。彼らはオランダにいる頃から商人として富を蓄え、その財産をより強固にしようと、アメリカにやってきた祖先をもつ人々であった。先祖代々引き継がれた富を持つてはいたが、それを特にひけらかすことなく生活していた。つまり、彼らの社交は、あくまでも同じような先祖を持つ「ご近所」とのお付き合いという程度のもので、お互いの家で食事をしたり、読書会をするくらいのものであった。

そのような穏やかなNY社交界は南北戦争を境に一変する。南北戦争によって一代で富を築いた人々が、NYにやってきたのだ。人々は彼らを新興成金（New Rich）と呼んだ。富裕層としてのノブレス・オブリージュや、社交上のマナーを知らず、ただ莫大な富だけを持ってNYにやってきた新興成金は、富を顕示することによって自らの力を表現した。つまり、血統や伝統を持たない新興成金たちは、自らが蓄えた富を必死に「見せびらかす」ことでしか、社交界で、その名を知らしめることができなかったのだ。

先祖代々守り続けてきたNY社交界を新興成金だけに牛耳らせることのないよう、伝統派の人々も、自らの富を顕示することで、新興成金の社交界での台頭の牽制をかけた。結局のところ、新興成金が流入することによって、NY社交界は、よりはっきりとした富の権威顕示を伴う社交界へと変化したのである。

オランダ植民地時代から、人口が増えるごとに少しずつ南から北へと拡大を続けたマンハッタン島は、5番街を中心に、富裕層の人々の物欲を満たすデパートメントストア、晩餐会を開催するレストラン、舞踏会を催す高級ホテル、そして、人々が思い思いに贅を尽くして飾り立てる邸宅が立ち並んだ。彼らがヨーロッパの古城や歴史的建造物を模して作り上げた邸宅は、富を顕示する手段となった。特に、新興成金の人々は、自らの社交界入りを伝統派に認めさせるため、金に糸目をつけずに、荘厳な外装の建物を建て、ヨーロッパから運んだ調度品、家具、そして絵画で内部を埋め尽くした。

一方で、貧困層はマンハッタン島の南端にとどまっていた。彼らの多くはヨーロッパから希望を胸に新大陸アメリカにやってきた移民たちであった。特に19世紀後期にはヨーロッパ各地から大量の移民が新大陸の玄関口であったNYに押し寄せ、そこにとどまった。マンハッタン

ウワー・イースト・サイドと現在でも呼ばれるエリアには、多くの移民街がひしめいた。そこでは普通、故郷を一緒にする人々がコミュニティを作って暮らしていた。ユダヤ人であれば、彼らはシナゴグのような集会所を作り、同郷の者同士助け合って日々の生活を送っていた。祖国では小作人として農業に従事していた移民たちは、NYでは農業に従事することもできず、工場毎日同じことが繰り返される仕事をこなした。移民の子供たちはパブリックスクールでアメリカの教育を受けた<sup>2</sup>。アメリカの歴史を学び、英語を学び、そして、教師が名前を呼びやすいように、生徒が自らを「アメリカ人」とであると自覚しやすいように、子供たちの名前はアメリカ風の発音と呼び名に変えられた。また、移民たちが苦労したのは労働環境だけではなく、彼らの住居も悲惨なもので、テナメントと呼ばれる狭小集合住宅に詰め込まれるように生活していた<sup>3</sup>。そして、そのテナメントの持ち主が富裕層の人々、特に伝統派の人々であったというのはなんとという皮肉であろうか。このように、移民たちは夢を持ち、アメリカは「金が道端に落ちている」国であると信じ、祖国を捨てて、あるいは祖国に家族を残す出稼ぎという形でアメリカにやってきたのにも関わらず、アメリカに到着してからは、慣れない仕事に追われ、自宅に帰っても、体をゆっくりと伸ばして休む場所もない環境に生活をしてきた。

しかし、一方で、富裕層の家庭で働いた家内労働者たちこそが、この移民街出身の若者たちであったのもまた事実である。彼らはなぜ家内労働者として働くことになったのかを次に考えていく。

## 19世紀後期 NY の家内労働者

### 19世紀アメリカの家内労働者の概要

19世紀初頭には、貧しい女性の職業はほとんどが家内労働者であった。実際、19世紀中期には15%から30%の家庭において1人以上の家内労働者を雇っていたという<sup>4</sup>。1800年にアメリカ中で4万人いた家内労働者の数は1910年には230万人にまで増えていた。その90%が女性であり、1870年時点では働く女性の70%が家内労働者として働いていた<sup>5</sup>。また、地域によって、雇われる家内労働者には違いがあった。南部では、奴隷制の名残があり、黒人家内労働者が圧倒的な割合を占めた。セントルイスやシンシナティにはドイツ系のコミュニティが多く存在したため、ドイツ語を話すことのできるドイツ系移民が重宝された。ミネソタ州、イリノイ州、ウィスコンシン州周辺の中西部ではスカンジナビアからきた移民が多く、西海岸では中国系男性を家内労働者として雇うことが通例であった。また、土地柄、南西部のメキシコとの国境に近い地域では、メキシコ人や原住民が家内労働者となっていた<sup>6</sup>。

19世紀初期、人々は家内労働者を‘servant’とは呼ばず、‘help’と呼んでおり、主従関係は比較的穏やかであったという<sup>7</sup>。特に1828年にノア・ウェブスターが‘help’を“a hired man or woman; a servant<sup>8</sup>”と定義してからは、その呼び方が北米において定着した。また、当時の家内労働者たちは、その家庭ごとに多種多様であり、都会育ちもいれば田舎育ちもいたし、アメリカ市民もいれば移民もいた。様々な人種の、様々な人々が家内労働者としての職業で生活を成り立たせていた<sup>9</sup>。家内労働者の内訳に変化が訪れるのが、19世紀中盤であった。その頃から、家内労働者として働くのは、圧倒的にアイルランド人移民が多くなった。特に10代から20代の若

い女性が多く、1855年には、NY市の家内労働者の74%がアイルランド人であり、アメリカ生まれの白人はたった4%、そして黒人でさえ、たった3%という状況であった<sup>10</sup>。

19世紀中ごろからアイルランド人移民が家内労働者の大部分を占めるようになったのは、いくつもの理由がある。1860年までに、アメリカ国内の外国生まれの人口の半分がアイルランド系であった。特に東部のボストン、フィラデルフィア、NYでは、移民グループの中で最大の規模となっていた<sup>11</sup>。しかし、最大の理由は、家内労働者という職業に対する偏見があったことだ。19世紀後期のアメリカで、読み書きのできない女性は全人口の22%、男性で13%であったが、家内労働者だけを見てみると、女性で23%、男性においては19%と、全国平均よりも若干ではあるが上回った<sup>12</sup>。また、人の家の掃除に従事するなど、人々の間では家内労働者とは、それ以外の「知的な」職業に就くことのできない人間の職業であるという偏見があったという<sup>13</sup>。また、家内労働者として働くということは、工場での仕事に比べて拘束時間が長く、生活のほとんどが「仕事」であることを意味した。ロウワー・イースト・サイドでも特に劣悪なエリアとして悪名高いファイブ・ポイントで最低限以下の生活をしている女性たちでさえ、家内労働者になることを嫌がったという<sup>14</sup>。ある若い女性は以下のように回想している。ペンシルヴェニア州のある村からNYにでてきた少女は、苦勞の末、やっとの思いで紙箱を作る仕事を得た。ある日、下宿が火事となり、自らの少ない所持品も灰となった。救済施設で一夜を明かした少女は、そこを経営する婦人に今後どうすればいいかと尋ねる。

「家内労働者の仕事についてみたら？」とその婦人は言った。

少女は驚愕した。その質問自体が驚くべきものだった。のちにこう回想している。「そんな選択肢は思いもしなかったので、即座にこう言いました。『家内労働者になるつもりはありません。』そう言うと、それを聞いた婦人の表情は失望と嫌悪の混在したものでした。」生き残るための最後の手段を放棄したにも関わらず、少女は「はっきりとした奴隷のバッジ」をつけることを拒否したことを誇りに思っていた。<sup>15</sup>

一文無しで宿無しになっても、家内労働者にはなりたくないというのが、当時の女性たちの感覚であったのがこのエピソードから垣間見える。『アンクルトムの小屋』の著者ストウ夫人でさえ、「家内労働者という仕事は、社会的には最も下部に位置する仕事である<sup>16</sup>」と著書に書いたという。

アメリカ生まれの女性たちが家内労働者という職業を敬遠する一方で、アメリカにやってきたアイルランド人移民たちの多くは、家内労働者としてアメリカでの生活をスタートさせた。19世紀中ごろまでにはNY市の女性家内労働者の4分の3がアイルランド人で、そのころには、アメリカ人の中でも家内労働者とは移民たちの職業だという意識も形成されたという<sup>17</sup>。

### 家内労働者としての仕事の見つけ方

アイルランド人移民の多くが、アメリカに到着してすぐに家内労働者として生活を始めたが、雇用主は、どのようにして家内労働者たちを雇ったのだろうか。また、女性たちはどのようにして、家内労働者としての職業を得たのだろうか。<sup>18</sup>

南北戦争前には、多くの公的あるいは私的な機関が家内労働者の紹介をしていた。ヨーロッパ

まで出向き、アメリカでの家内労働者を探した時期もあったが、この方法はすぐに経済的に行き詰まり減少した。しかし、確実に「良い」家内労働者を得る手段は、知人や親せきから紹介してもらうことであった。新聞広告から探すというのも一つの手段ではあったが、新聞広告をださなければ仕事がないような家内労働者はたいした者ではないというのが一般見解であった。

19世紀中ごろには、個人が経営するインテリジェンス・オフィスと呼ばれる職業紹介所の登場を経て、公共の職業紹介所であるレイバー・エクスチェンジが設立された。もっとも有名なのは、1850年にNY市に登場したものであった。さまざまな職が紹介されたが、その中でも特に多かったのが家内労働者であった。1860年代には2万5千人の家内労働者がレイバー・エクスチェンジを介して雇用主に紹介された。

そのほかにも、教会後援の紹介所もあった。これは、主に家内労働者の搾取をなくすべく設立されたものであった。また、より良い条件を提示するなどして家内労働者を引き抜くこともあったが、これは、その後の前雇用主と家内労働者の関係はもとより、前雇用主と自らの友好関係をも壊す犠牲があったため、稀であったという。

見ず知らずの他人の家で仕事をする家内労働者たち同様、雇用主にとっても、見ず知らずの人間、特に素性のしれない移民たちを住み込み家内労働者として雇うことは決心のいる問題であった。『アメリカ人と家内労働者』の著者、ダニエル・E・サザーランドは、家内労働者とは「家の中にいる他人<sup>19</sup>」であったと述べている。特に移民は服装、習慣、言葉のどれをとっても雇主にとって未知の存在ではあったが、アメリカ育ちの女性が家内労働者という職業を敬遠する中、移民を家内労働者として雇うことは仕方のない選択であった。

一方で、アイルランド人に対する雇用差別も存在した。1853年の『NY・サン』紙に以下のような求人広告が載った。「女性求む。一家事全般の仕事。清潔で、こざれいで、勤勉であること。そして、性格がよく、やる気があることを前提とする。アイルランド人以外なら、イギリス人、スコットランド人、ウェールズ人、ドイツ人など、どこ出身でもどんな人種でもお返事します。<sup>20</sup>」このような、あからさまな差別に関しては、アイルランド人コミュニティは抗議をするも、ほとんどが受け入れられることはなかった。また、アイルランド人を雇う家庭でも、本来アイルランド人は無知でマナーを知らず、性格も気まぐれで言葉遣いも悪い一方で、体が丈夫で、大変な仕事にも耐える体力があるため、仕方なく雇っているという本音があったという<sup>21</sup>。ただし、アイルランド人への差別は女性に対してだけのもので、男性家内労働者に関しては、アイルランド人への差別は特になかったようだ<sup>22</sup>。

## 19世紀後期 NY の家内労働者たちの暮らし

### 家内労働者の存在意義

『有閑階級の理論』で有名なソースティン・ヴェブレンによれば、富裕層にとっての家内労働者とは「通常の仕事のためにではなく、その地位をひけらかすためにのみ必要<sup>23</sup>」であったという。事実、NY社交界の人々がその邸宅に数えきれないほどの家内労働者たちを雇う理由の一つは、その数と、彼らの完璧な仕事ぶりを人々に見せつけるというものであった。これがまさにヴェブレンのいうところの「見せびらかしの社交」と「見せびらかしの消費」を具現化したものであっ

た<sup>24</sup>。

また、当時、多くの家庭では家内労働者に黒や紺色の濃い色の服、白いエプロンと白い帽子などの制服を着用させた<sup>25</sup>が、社交界の人々はヨーロッパの貴族の館で働く家内労働者を模倣させることで、自らの富を見せびらかした。例えば、ヴァンダービルト家の中でも、特にその派手な消費と社交で名声を得たウィリアム・キッサムとアルヴァ・ヴァンダービルト夫妻は、屋敷で晩餐会や舞踏会などの社交を繰り広げる際には、家内労働者にエビ茶色の制服を着せ、頭には白髪のかつらをのせて、ヨーロッパ貴族の館さながらの雰囲気を作った。また、アスター夫人は、イギリス王室がウィンザー城で家内労働者に着せた制服を真似て、自らの家内労働者たちにロイヤルブルーの制服を着せ、かの「アスター夫人舞踏会」で、客人たちのもてなしをした。<sup>26</sup>

NY 社交界の人々の邸宅には多くの家内労働者が働いていた。家内労働者の仕事は多岐にわたり、またそれぞれの仕事は細分化されていた。19 世紀後期の NY 社交界の家庭に属していた家内労働者は、以下のものであった<sup>27</sup>。まず女性の家内労働者は、家政婦（Housekeeper：女性の召使の責任者）から始まり、侍女（Lady's Maid：女性たちに個人的に仕えて身の回りの世話をする）、部屋女中（Chamber Maid）、客間女中（Parlor Maid：来客の取次や客間で食事の給仕を行う）、洗濯係、荷造り・荷解き専門の家内労働者、壁や床などの「磨き」専門家内労働者から成った。男性の家内労働者で最も重要だったのが、執事（Butler：邸宅内の全ての家内労働者の監督をする）で、次に料理長（Chef de Cuisine）、側用人（Valet：男主人に個人的に仕えて身の回りの世話をする）、従僕（Footman：制服を着て客のもてなしをする）、馬車係と馬の飼育係、運転手と修理工などから成った。邸宅全体のために働く家内労働者のほかにも、家族のメンバーそれぞれに仕える家内労働者もいた。特に、夫人には、社交における雑用（手紙の整理やスケジュールの管理など）を引き受ける個人秘書、小さい子供にはイギリス人の乳母、大きい子供にはフランス人の教育係がついた。それぞれの家内労働者の下には、それぞれを手助けする家内労働者が数名いたという。執事、従僕、客間女中、馬車係そして子守にはイギリス人、料理長、侍女、そして教育係にはフランス人、部屋女中と洗濯係には、アイルランド人が好まれたという<sup>28</sup>。また、男性の家内労働者は、女性の家内労働者よりも地位が上で、主人に対してより近い場所や、外側から見える世界、例えば食事の給仕や客の迎えなどの仕事を任されることが多かったという<sup>29</sup>。

家内労働者とはいえ、その地位は大きく 2 つに区別されていた<sup>30</sup>。家族のメンバーを個別に世話し、基本的に常と彼らと直接対面する少数の上級家内労働者と、洗濯など裏方の仕事をし、家族たちと直接関わりのない多数の下級家内労働者であった。上級家内労働者の中でも、最も高い位置に身をおくのが執事であった<sup>31</sup>。特に、イギリス人の執事を雇うことが誇るべきこととなっていた<sup>32</sup>。執事の主な仕事は、訪問者を迎え入れたり、社交や晩餐会を監督したり、食事を給仕したりするものであった。

男性家内労働者の中で、最も地位が高いのが執事ならば、女性家内労働者の最高位が家政婦であった<sup>33</sup>。家政婦は、女性家内労働者たちの中心人物で、彼女たちの仕事の監督やしつけ、女性家内労働者を雇う際の面接まで、全てに責任をもっていた。また、家計の支出など、会計を全て引き受けたのも家政婦であった。

そして、執事、家政婦の次に位の高い家内労働者が、料理長であり<sup>34</sup>、特にフランス人が好ま

れた。料理長はその家庭の家内労働者の一部とはいえ、ほかの家内労働者とは一線を画した。他の者たちが、その家庭のために働く労働者であるのに対して、料理長は、あくまでもその家庭に雇われている職人であった。料理長は、通常、日常の食事を作ることはなく、晩餐会や昼食会にのみ情熱をささげた。料理長は、食事関連の家内労働者の頂点に立っていたが、日常的に、主な仕事をこなすのは、調理場専門の副料理長であった。副料理長は、日々の食事に責任を持っており、主人の日々の食事だけではなく、家内労働者たちの食事の準備もした。

料理長に次ぐ上級の家内労働者は、側用人と侍女であった<sup>35</sup>。側用人は、男主人専属の家内労働者で、洋服の選び方から靴磨き、風呂の手伝い、髭剃り、散髪、旅行の手配など、日常の全てに気を配った。また、側近として男主人の秘密の交友やアリバイ作りなど、徹底して男主人のために働く役目を担っていた。側用人の女性版が侍女で、仕事内容は、基本的には側用人と同じであったが、特に女主人のファッションに全て責任を負うところから、フランス人が好まれた。

また、従僕も、上級家内労働者の一部であった<sup>36</sup>。人前にでることが仕事であったため、外見の良さが採用基準となった。身長は高ければ高いほどよく、白いストッキングを制服として着用するため、ふくらはぎの形も重要視された。

女性の家内労働者の地位は、男性のそれより低かったが、その中でも地位が高かったのが、部屋係の女性で、特に寝室での世話をした。次に地位の高いのが、客間女中であった。また、同じ家庭に雇われた家内労働者とはいえ、屋外の仕事をする人々は、屋敷の中の仕事をする家内労働者とは、一線が引かれていた。

このように、家族のために、様々な種類の家内労働者が大勢働いていたが、家内労働者の生活は細かい規律に縛られ、非常に窮屈なものであった<sup>37</sup>。ほとんどの家内労働者が、主人の紹介なしには、地元の図書館から本さえ借りることができなかった。通常、執事と料理長のみが、結婚して家庭をもつことを許されており、家政婦は、通常、未亡人や年配の独身女性となる職業であった。そのほかの家内労働者たちも、個人的な異性関係をもつことは表面上許されておらず、もし異性との交遊が明るみに出た場合には、即刻解雇された。また、主人たちに話しかけられない限り、自分から口を開くことは許されず、家内労働者同士でも、主人の前ではおしゃべりは厳禁であった。仕事中に、廊下などでその家の家族とすれ違うことになった時には、壁に向かい、決して顔を合わせないよう指導されている場合もあったという<sup>38</sup>。

雇主は、常に家内労働者との関係を思い悩んだようだ。1830年代のイギリスからの旅行者は「富裕層家庭の人々は、常に家内労働者に対する不満を漏らしていた<sup>39</sup>」と回想している。家内労働者に対する不満があったにも関わらず、その指導の仕方は難しく、例えば、当時のマナー本には、必ずと言っていいほど、人前で決して家内労働者を叱ってはいけないと書かれていた<sup>40</sup>。しかしながら、雇主は自らが家内労働者を「教育」することが、社会的な使命であると考えており<sup>41</sup>、移民の家内労働者たちには、アメリカ式の台所や様々な慣習を知らず、一から様々なことを教える必要があったが、それらを辛抱強く教え、一人前の家内労働者に育てることが求められた。

### 家内労働者たちの生活と賃金

基本的に家内労働者たちは、その家の主人の決めたルールに沿って仕事をし、生活をした。多

くが、邸宅の外で主人と顔を合わせた場合には、お互いに知らぬ顔をするよう言われた<sup>42</sup>。しかし、移民女性たちは主に下級家内労働者であったため、実際は屋敷の中でさえ、主人と顔を合わせることは稀であった<sup>43</sup>。家内労働者という職業が敬遠された理由はその拘束時間の長さも一因であった。1週間のうち休みは、日曜日の半休と、どこかの曜日の夜に1回だけもらえた。月に1回全休があり、1年に1度だけ1週間休暇をもらうことができた<sup>44</sup>。

家内労働者と主人とは、一つ屋根の下に住んだわけだが、社交界の人々の邸宅の作りは、これを予期した造りをしており、家内労働者と主人たちが顔を合わさずとも十分生活ができるよう、邸宅の端に家内労働者専用の棟を造る工夫がされていた。家内労働者専用の棟には、キッチン、パントリー、洗濯室、食器部屋などから成る部分、家内労働者専用のダイニングルーム、男女別に別れた共同寝室そして、執事とハウスキーパーにはそれぞれ専用のオフィスがあてがわれた<sup>45</sup>。寝室は、通常、男性家内労働者は地下にあり、女性家内労働者は屋根裏にあることがほとんどであった。地下であれ屋根裏であれ、十分に日の入る窓や、暖房設備、水道設備はなかった<sup>46</sup>。主人や客人が使う玄関は、威厳があり立派なものであったが、家内労働者たちは、裏口の専用の入り口からのみ出入りを許された。主人たちが使う毛足の長い絨毯が敷き詰められた階段を使うことなく、家内労働者たちは絨毯も灯もない裏階段を使った。また、各部屋のドアは白いペンキで美しく塗装され、クリスタルの取手がついていたが、その裏側、つまり家内労働者たちが日々目にする面は緑のフェルト地が貼られ、簡素な取手がついていた<sup>47</sup>。邸宅が大きければ大きいほど、家内労働者の数も多かったため、家内労働者用の棟の規模も大きくなった。例えば、19世紀のNY社交界の人々の避暑地であったニューポートで、最も豪華かつ最大を誇ったブリーカーズには邸宅全体で70の部屋があったが、そのうちの30部屋は家内労働者棟にあった。また、ヴァンダービルト家の異端児ジョージ・ワシントン・ヴァンダービルト2世が母と住むためにノースカロライナ州の広大な手つかずの自然の中に建設したビルトモアには、敷地正面からは目隠しとなるように、木々で覆われた家内労働者用の別棟が建設されていた<sup>48</sup>。

1840年代に、台所は様々な近代化が進んだが、家内労働者たちの個室に関しては、一切の変化はなかった<sup>49</sup>。とはいえ、それでも、住み込みの家内労働者は、工場で働く女工よりもいい生活ができたという。まず一つに、部屋の環境はよくないが、移民街に乱立したテナメントよりは良い環境であった。さらに、邸宅は、普通高級住宅街にあったため、安全で美しい地域に住むことができた。そして、賃金に関しては、時給4ドルから8ドルと、女工のそれとほぼ同等であったが、部屋代と食事代を別途必要としないというのが大きなメリットであった。

その浮いた賃金で、アイルランド人移民たちは、祖国に仕送りを続けた。彼らにとって、アメリカに渡ってから、一刻も早く祖国で待つ両親や兄弟に仕送りをすることが心からの思いであった。1845年から1865年にアイルランド人がアメリカから祖国に送金した金額は約1億2千ドルで、そのほとんどが家内労働者を職業とする人々からであったという<sup>50</sup>。また、『女性たちの街：1789年から1860年までのNYにおける性と社会階層』の著者、クリスティーン・スタンセルは、家内労働者だけが、女性労働者の中で預金をしていた労働者であると指摘している<sup>51</sup>。

## 余暇と犯罪

1840年代になると、NY市では、社交界の家に働く制服姿の家内労働者が見られるようになって

た<sup>52</sup>。家内労働者に制服を着せるのには、2つの理由がある。一つは、特に上級家内労働者にヨーロッパの宮廷を模した制服を着せることで、客人が訪問した際に、その家自体に威厳を与えることができた。そして、2つ目の理由としては、特に下級家内労働者に制服を着せることで、主人との主従関係をはっきりとさせる狙いがあった<sup>53</sup>。

一方で、多くの家内労働者が若い女性であるから、仕事から離れた時には素敵な服を着たいと思うのも、また自然なことだった。他の労働者よりも、部屋代と食事代の分、余分な金を持っていた家内労働者たちは、その余った金でドレスを作ることもあった。実際、当時の家内労働者たちは、賃金の中でも、服飾代にける割合が多いことで知られていて、休日に外出する際には、「家内労働者などではなく、その家の主人かと思われるほどのレディに見えた<sup>54</sup>」と指摘されている。通常1着のドレスを作るには1か月の給料ほどの金額が必要だったが、中には、年間8枚のドレスを新調した者もあった<sup>55</sup>。家内労働者が良いドレスを着ていることは、そのように上品な服を選ぶよう教育した主人のステータスが上がる一方で、素敵なドレスを着ることで、自らも社会的地位を上げたつもりとなり、主従関係が弱まるという矛盾も抱えた<sup>56</sup>。

生まれが貧しく、少しでも金を稼ぐためにアメリカに渡り、社交界の人々の邸宅での住み込みの家内労働者の職についた女性たちにとって、その邸宅におかれた様々な調度品や家具は、どれも美しく、信じられないほど高価なものであった。それらを目の前にして、中には、魔が差し、盗みを働く女性たちもいたという。ある家内労働者は、盗みを働いた理由を問いただされ、「酔っぱらって、つい奥様の衣裳部屋に入り込んで、好き勝手にしてしまった<sup>57</sup>」と答えている。

そして、窃盗の次に大きな問題となったのが、売春婦の過去の職業として、家内労働者の割合が圧倒的に多かったという点だ。家内労働者たちは、寝室は別であったといえども、男性家内労働者と同じ屋根の下に共同生活しているため、性に対して奔放になりやすかったという。また、特に下働きをする女性家内労働者たちは、熱湯で洗濯をしたり、空調設備のないキッチンで料理をしたりする中で、薄い服装になったり、上腕まで腕まくりをしたり、当時の女性たちの中では、肌の露出が、結果的に多くなったことも、男性からの視線を集めやすい理由の一つであった<sup>58</sup>。実際に、歴史家のフィリス・パルマーは西洋において、「『汚さ』と『性』は常に関連付けられて語られてきた<sup>59</sup>」と指摘している。

事実、職業別にみると、1850年から1920年で、最も性病率が高かったのは家内労働者たちであったという<sup>60</sup>。またスタンセルは、職業紹介所では売春宿の主人たちが、新しい売春婦をリクルートしていたと指摘している<sup>61</sup>。1859年に刊行された『売春の歴史』によると、当時刑期を勤めていた売春婦の約半分が家内労働者として過去に働いたことがあったという<sup>62</sup>。ただし、一方で、家内労働者の大部分を構成したアイルランド人たちは敬虔なカトリックであったため、その割合の割には、売春婦となることはほとんどなかったという<sup>63</sup>。

確かに、工場で女工として働く女性たちに比べ、家内労働者の女性たちには、家族や親類からの監視の目が行き届かない。また、社交界の人々の豪華絢爛な生活を目の当たりにすることで、美しいもの、高価なものへの憧れが強くなることもまた否めない。そのような環境の中で、あと少しの現金欲しさに、売春という方法を選ぶのも、また彼女たちにとってみれば、自然なことであったのかもしれない。

## 『無垢の時代』に描かれる NY 社交界の家内労働者たち

19世紀後期の富裕層家庭に欠かせない存在であった家内労働者ではあるが、これまでの考察でもわかるように、特に下級家内労働者は決して目立つことのない存在であった。「見せびらかし」の手段として重宝された上級家内労働者に関しても、そこに確かに存在はするものの、名前があるわけでもなく、その存在はまるで、その屋敷に美しく並べられたヨーロッパから丁寧に運び込まれた調度品と同じ程度のものであった。

実際に、社交界を描いた文学作品にはどのように描かれているのか。家内労働者は、基本的に影の存在であったから、社交界が舞台である文学作品の中に、詳述されたり、それこそ主人公の扱いで登場したりすることはない。しかし、社交界出身の作家であるイーディス・ウォートンの『無垢の時代』では、伝統派の主人公ニューランド・アーチャーの家庭やヴァン・ダー・ライデン家で働く家内労働者と、新興成金の代表として描かれるボーフォート家の家内労働者、そして、ヨーロッパ貴族に嫁いだものの、当時の NY 社交界では到底受け入れられない制度であった離婚をするべく NY に戻ってきたエレン・オレンスカが一人で暮らす家に雇われる家内労働者との間に、非常にわかりやすい違いが描かれている。この描写の違いから、当時の社交界の人々の家内労働者の認識を考えてみたい。

### 伝統派家庭の家内労働者の描かれ方

常に人の視線を意識し、他人にどう見られるのかを気にする NY 社交界の生活を、ヨーロッパでの結婚生活から逃れ、故郷であるはずの NY に戻ってきたエレン・オレンスカ夫人は息苦しく感じている。彼女は NY 社交界の暗黙のルールをいとも簡単に逸脱して、周囲の人々の息をのませることもしばしばである。そんな彼女が NY 社交界の伝統派の中でも特に重鎮として人々から敬われているヴァン・ダー・ライデン夫妻の別荘に滞在しているときに、別荘の離れで作品の主人公であり、エレンと心を通わせながらも、社交界のしがらみから逃れることのできないニューランド・アーチャーに言う。「…あの神学校のような大きな家では、一分たりとも一人にはなれません。扉は全部開け放しですし、いつも、召使がお茶をもって来たり、暖炉の薪を運んできたり、新聞をもって来たりですもの！<sup>64</sup>」事実、社交界の屋敷で働く上級家内労働者たちは、主人の日常生活に困ることがないよう、呼ばれればすぐにでていけるよう待機し、また、呼ばれなくとも、何か足りなくなれば、進んで足し、何かが多すぎれば、進んで減らした。もともと家内労働者は存在を消して働くべき存在であったから、本来、家内労働者がお茶を運んで来ようとも、薪をくべようとも、気にすることはないはずなのであるが、主人たちも家内労働者たちに耳があることは十分わかっていた。例えば、ニューランドが自宅で母親に、エレンは離婚すればいいと話す場面で、母親は「細い眉を独特の曲線に吊り上げたが、それは『執事がいるでしょう』ということの意味するものだった<sup>65</sup>」とある。本来、個人の領域である家庭の中に、仮にその存在が空気のようにあっても、家内労働者という他人が入り込むことによって、伝統派の人々がそれを苦々しく感じていたことがわかる。

また、伝統派の家庭の家内労働者は、「陰気な顔つきの執事<sup>66</sup>」や「悲しげな顔つきの執事<sup>67</sup>」などといった否定的な表現が目立つ。また、その働きについても、「何故アーチャー夫人の料理人は卵が炭になるまでこがしてしまうのだろう<sup>68</sup>」や「どうして誰も執事に鋼の包丁で胡瓜を切っ

てはいけないと言わないのだろう<sup>69</sup>」のように、仕事ぶりでさえ十分に評価していない表現が目立っている。これは、まだこの時代には伝統派が新興成金に比べ、自らの富を見せびらかす必要がなかったことと関連するだろう。最低限の仕事ができる家内労働者を置き、主人にとって十分な仕事をこなすことが家内労働者に求められていることだったことがうかがえる。

### 新興成金家庭の家内労働者の描かれ方

一方で、新興成金として描かれるボーフォート家の家内労働者たちは、伝統派の家内労働者たちと明らかに一線を画している。ボーフォート夫妻が1年に一度盛大に主催する舞踏会では、夫妻は「夕食や舞踏室の椅子と一緒に借りるかわりに、専用の赤いベルベットの絨毯を所有し、自家の従僕の手でそれを雨よけの下の玄関の階段に敷かせ<sup>70</sup>」た。通常、舞踏会の夜には、多くの家では、そのためだけに、臨時の家内労働者を数名雇うことが慣例であったため、自家で所有する家内労働者だけで舞踏会を開催できること自体がすでに彼らの「見せびらかす」べき富であったことはいうまでもない。また、彼らは、「〔ニューランド〕は外套を絹の靴下を履いた従者に預け<sup>71</sup>」とあるように、当時の新興成金の流行にもれず、自らの家内労働者たちにシルクストッキングをはかせていた。

また、興味深いのは、新興成金であるボーフォートが、自ら社交界を変容させるべく、新しい時流を作ろうとしていたことが伺える描写があることだ。元来、社交界の婦人たちは、舞踏会で会場である主催者の邸宅に行く際には、玄関から邸宅に入ったあと、「女主人の寝室へと裾を引きずりながら上がり、ガス・バーナーの助けを借りて髪を整え<sup>72</sup>」た。つまり、招待客たちは、外出用のマントを脱ぐという名目で女主人の寝室に向かい、そこできれいに髪を整えることができた。しかし、ボーフォートの舞踏会では、招待された婦人たちはマントを玄関の広間で脱ぐこととなった。これはボーフォートが「妻の友人たちは皆、小間使いを雇っているから、髪を美しく整えて家を出る<sup>73</sup>」と言った為であり、古いしきたりを壊し、新しい習慣を作ろうとするボーフォートの姿勢を見て取れる。また、玄関でマントを脱ぐためには、それを手伝う上級家内労働者が数名必要なことが伺える。つまり、それを用意する経済的余裕を演出することができたのだろう。

### 異端者の家の家内労働者の描かれ方

『無垢の時代』における家内労働者の描写で最も興味深いのが、NY 社交界では異端者であると思われるエレン・オレンスカ夫人の家内労働者である。まず彼女の住んでいる場所が他の社交界の人々とは異なっている。当時の社交界の人々の邸宅が密集するエリアよりも南側、どちらかという芸術家などが住むエリアに小さな居を構えている。そこに1人で住むエレンはナスターシャと呼ばれる浅黒い肌をしたイタリア系と思われる家内労働者を雇っている。

ナスターシャが初めて登場する場面で、ウォートンはナスターシャを「華やかなネッカチーフの下から豊かな胸を覗かせている<sup>74</sup>」と表現した。また次にナスターシャが登場する場面でも「豊かな胸をした女中<sup>75</sup>」としている。当時の上級家内労働者たちが客人の対応をする際に、胸をだけさせた格好をしていることはあり得なく、先述のように、袖をまくり上げたり、洗濯などで暑さ故に胸があいてしまっているのは、客人はもちろんのこと、主人にさえ本来は姿を見せる

ことのない下級家内労働者に限られた。また、エレンとナスターシャの関係も社交界の他の人々のそれとは異なっていた。エレンはナスターシャを名前で呼び、またニューランドに対しても「ナスターシャが間もなくお茶を持って参ります<sup>76</sup>」と名前で紹介する。その後も、エレンは、近所にナスターシャを使いに出す際に、自らの外套を羽織らせるなど、NY 社交界の常識を逸脱する行動を自然とする。

エレンの家には日本風の食器が登場し、彼女が家で来ているドレスも、他の人々とは違う。ウォートンは、家内労働者のナスターシャも、明らかに他の家庭とは異種の存在として描くことで、エレンの特異性を描写したと思われる。その意味でも、やはり、家内労働者は新興成金や伝統派のそれと同様で、あくまでも調度品のようにそこに存在するだけのものとして描かれるにとどまっている。

実際に、エレンとニューランドの情事を間近でみたはずのナスターシャがどう思ったのか、ヨーロッパの王家の家内労働者のごとく着飾ることを命じられた新興成金の家内労働者たちが、人前に出る時だけ、まるで別人になるようなその衣装をあてがわれ、一日の仕事を終え、その制服を脱ぎ、自らの質素な寝間着に着替える時に、何を思ったのか、伝統派の執事が、主人たちの本音を聞いて何を感じ、何を家内労働者同士で囁いたのかは、何処にも描かれていない。

## 終わりに

19 世紀、新大陸アメリカには旧大陸ヨーロッパから多くの移民がやってきた。彼らのほとんどが、宗教的抑圧や経済的貧窮からの解放を求めて、新大陸にやってきた。祖国にある全てを捨て家族で渡ってきた者もいれば、単身、家族の期待を背負って、ある一定の金額を稼ぐためにやってきた者もいた。その多くがロウアー・マンハッタン<sup>77</sup>の劣悪な環境のスラム街に住みつき、暗い部屋で同郷の移民たちと共に寝起きし、過酷な労働環境の中で日々汗を流した。彼らが触れるもの、見るものはどれも汚く、彼らが祖国で聞かされていた「道路に金のおちている国アメリカ」とはほど遠いものであった。しかし、それこそが、本来の移民の生活であった。

一方で、その多くの移民たちとは、違った生活を送る移民たちがいた。それが主にアイルランド人移民を中心とした家内労働者たちであった。彼女たちは、アメリカにきてすぐに、NY 社交界の人々が暮らす邸宅の下級家内労働者としての職業を得た。彼女たちは、基本的に住み込みの家内労働者として雇われ、高級住宅街にある瀟洒な豪邸で生活をした。その家族たちが実際に生活をするいわば「表の」邸宅と、彼女たちが仕事をし、生活をする「裏の」邸宅とは、異なるものではあったが、美しいものに触れ、美しい調度品を見た彼女たちは、明らかに移民たちの中でも特異な存在であった。

しかし、「富のある生活」に触れることができて、彼女たちが実際に富を得ることはなかった。富に触れる経験ばかりが大きくなり、それを支える実際の富のない彼女たちが、実際の自分たちの生活とのバランスをとるのは容易ではなかっただろう。中には、美しいもの欲しさに、窃盗に走る者もあれば、美しいドレスを着るための小銭欲しさに、自らを売る者もいた。

社交界の人々は、自分たちの家内労働者を教育し、アメリカ式の生活を教え、道徳的に高めることで、彼らを救済していたつもりであったかもしれないが、結局、富なくしては、彼らの教え

たことはどれも空虚なものであった可能性がある。実際、19世紀のNY社交界の人々は、その富の顕示や中身のない社交に対して、常に「空虚である」「ただの見せびらかしである」と批判をされてきた。つまるところ、19世紀のNY富裕層に仕えた移民出身の家内労働者たちもまた、彼らの主人のごとく、「見せかけだけの富」に踊らされた人々であった。

ウォートン作品に描かれる家内労働者からも垣間見えたように、家内労働者の描写は社交界の人々からの視点に限られたものが圧倒的に多い。だからこそ、エレンの家内労働者ナスターシャも「浅黒い外国人らしい女中<sup>77</sup>」というあいまいな表現をされる。家内労働者は何を考えながら彼らの仕事をしていたのか。社交界の人々が見る家内労働者と、家内労働者自らの視点はどのように違ったのか、また、さらに家内労働者たちから見た社交界はどうであったかなどを今後の研究課題として、本稿を終えたい。

## 注

- <sup>1</sup> King, Greg. *A Season of Splendor: The Court of Mrs. Astor's Gilded Age New York*. Hoboken, N.J.: John Wiley & Sons, Inc., 2009. p. 368.
- <sup>2</sup> 野村達朗、『ユダヤ移民のニューヨーク』、山川出版社、1995年、128頁。
- <sup>3</sup> テナメントについての詳細は Coontz, Stephanie. *The Social Origins of Private Life*, New York, NY: Verso, 1988, p296、Ewen, Elizabeth. *Immigrant Women in the Land of Dollars: Life and Culture on the Lower East Side 1890-1925*. New York, NY: Monthly Review Press, 1985, p27、Howe, Irving. *World of Our Fathers: The Journey of the East European Jews to America and the Life They Found and Made There*. New York, NY: Harcourt Brace Jovanovich, 1976, pp.142-151 を参照。
- <sup>4</sup> Dudden, Faye E. *Serving Women: Household Service in Nineteenth-Century America*. Middletown, Conn.: Wesleyan University Press, 1983. p. 1.
- <sup>5</sup> Sutherland, Daniel E. *Americans and Their Servants: Domestic Service in the United States from 1800 to 1920*. Baton Rouge, LA: Louisiana State University Press, 1981. p. 42.
- <sup>6</sup> O'Leary, Elizabeth L. *At Beck and Call: The Representation of Domestic Servants in Nineteenth-Century American Painting*. Washington D.C.: Smithsonian Institution Press, 1996. p. 113.
- <sup>7</sup> Stansell, Christine. *City of Women: Sex and Class in New York 1789-1860*. Chicago, IL: University of Illinois Press, 1987. pp. 12-13.
- <sup>8</sup> Sutherland, p. 125.
- <sup>9</sup> Stansell, P. 156.
- <sup>10</sup> *Ibid.*
- <sup>11</sup> O'Leary, p. 112.
- <sup>12</sup> Sutherland, p. 63.
- <sup>13</sup> *Ibid.*, p. 7.
- <sup>14</sup> Anbinder, Tyler. *Five Points: The 19<sup>th</sup>-Century New York City Neighborhood That Invented Tap Dance, Stole Elections, and Became the World's Most Notorious Slum*. New York: The Free Press, 2001. p. 123.
- <sup>15</sup> Cited in Sutherland, pp. 1-2. 本稿における日本語訳は『無垢の時代』からの引用部分を除き、全て筆者による。
- <sup>16</sup> O'Leary, p. 126.
- <sup>17</sup> Sutherland, pp. 49-50.

- <sup>18</sup> 家内労働者の雇用方法についての詳細は Sutherland、16 頁から 21 頁を参照のこと。
- <sup>19</sup> Sutherland, p. 38.
- <sup>20</sup> Anbinder, p. 128.
- <sup>21</sup> O'Leary, p. 114.
- <sup>22</sup> *Ibid.*
- <sup>23</sup> Dudden, pp. 125-126.
- <sup>24</sup> O'Leary, p. 170.
- <sup>25</sup> *Ibid.*, p. 168.
- <sup>26</sup> *Ibid.*, p. 167.
- <sup>27</sup> Cable, Mary. *Top Drawer: American High Society from the Gilded Age to the Roaring Twenties*. New York: Atheneum, 1984. p. 86.
- <sup>28</sup> King, p. 196.
- <sup>29</sup> *Ibid.*, pp. 196-7.
- <sup>30</sup> *Ibid.*, p. 197.
- <sup>31</sup> *Ibid.*, pp. 197-8.
- <sup>32</sup> O'Leary, p. 176.
- <sup>33</sup> King, pp. 198-9.
- <sup>34</sup> *Ibid.*, pp. 199-200.
- <sup>35</sup> *Ibid.*, pp. 200-1.
- <sup>36</sup> *Ibid.*, pp. 201-2.
- <sup>37</sup> *Ibid.*, pp. 205-7.
- <sup>38</sup> O'Leary, p. 167.
- <sup>39</sup> Stansell, p. 157.
- <sup>40</sup> Sherwood, Elizabeth. *Manners and Social Usages*. New York: Harper and Brothers, 1887. p. 268.
- <sup>41</sup> Stansell, p. 163.
- <sup>42</sup> Sutherland, p. 29.
- <sup>43</sup> ホーン、パメラ『ヴィクトリアン・サーヴァント：階下の世界』子安雅博訳、英宝社、2005 年、35 頁。
- <sup>44</sup> King, p. 207.
- <sup>45</sup> O'Leary, p. 166.
- <sup>46</sup> *Ibid.*
- <sup>47</sup> ホーン、183 頁。
- <sup>48</sup> O'Leary, p. 166.
- <sup>49</sup> Stansell, p. 160.
- <sup>50</sup> Anbinder, p. 127.
- <sup>51</sup> Stansell, p. 156.
- <sup>52</sup> Dudden, p. 109.
- <sup>53</sup> Sutherland, p. 30
- <sup>54</sup> O'Leary, p. 169.
- <sup>55</sup> Stansell, p. 164.
- <sup>56</sup> *Ibid.*
- <sup>57</sup> Anbinder, p. 127.
- <sup>58</sup> O'Leary, p. 125.
- <sup>59</sup> Cited in O'Leary, p. 125.

<sup>60</sup> Sutherland, p. 70.

<sup>61</sup> Stansell, p. 167.

<sup>62</sup> O'Leary, p. 128.

<sup>63</sup> *Ibid.*, p. 129.

<sup>64</sup> ウォートン、イーディス『無垢の時代』佐藤宏子訳、荒地出版社、1995年、100頁。

<sup>65</sup> 同、32頁。

<sup>66</sup> 同、30頁。

<sup>67</sup> 同、68頁。

<sup>68</sup> 同、28頁。

<sup>69</sup> 同、29頁。

<sup>70</sup> 同、18頁。

<sup>71</sup> 同、18頁。

<sup>72</sup> 同、18頁。

<sup>73</sup> 同、18頁。

<sup>74</sup> 同、53頁。

<sup>75</sup> 同、55頁。

<sup>76</sup> 同、56頁。

<sup>77</sup> 同、53頁。

